



Title	近世における俵物・諸色の研究：北奥・蝦夷地を事例に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	菅原，慶郎
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11625号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58713
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yoshiro_Sugawara_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 菅 原 慶 郎

学位論文題名

近世における倭物・諸色の研究 ～北奥・蝦夷地を事例に～

近世におけるわが国の対外関係の特質をめぐっては、1980 年代以降、いわゆる「鎖国」得失論のパラダイムを脱し、長崎・鹿児島・対馬・松前の四つの窓口を介した、幕府による通交管理のシステムを解明するという地平に立った研究が重ねられてきた。このうち、長崎における貿易につき、とくに対中国貿易に占める輸出海産物の比重が、貴金属資源流出抑制の政策を背景に 17 世紀後半以降高まってきたことに注目が寄せられ、その調達システムの変遷や生産の構造に関する個別研究が重ねられているのが、研究の現状である。

本論文はこの問題につき、個別具体的な実証研究を志した。そのために、輸出海産物調達体制が変化する 18 世紀後半～19 世紀初頭の松前・蝦夷地、ならびに北奥地域（弘前藩領・盛岡藩領）に焦点を絞り、幕府による輸出海産物の調達に携わった長崎の町人の史料（手稿史料が主）につき博搜・精査し、そこから得られたデータを分厚い先行研究と丹念に照らし合わせることにより、当該期当該地域から長崎への輸出海産物調達・回漕のシステムの実態を、可能な限り明らかにして見せた。いずれもオーソドックスな経営史料分析の手法を用いた、手堅い論証であった。

本論文はこれに止まらず、個別の地域を対象に、精緻な事例研究を試みた。西蝦夷地タカシマ・ヲシヨロ場所（現：小樽市域）、ならびに東蝦夷地トカチ場所（現：十勝総合振興局管内）に材を取り、産物の独占集荷の特権を有する場所請負人の史料に立脚し、個別事例の集積にもとづき輸出海産物生産の構造を析出することに成功している。その際、生産の担い手がアイヌ集団であることが明らかにされたが、この点に鑑み、アイヌ史的な評価を試みていることも、特記されて然るべきだろう。

本論文は全 7 章からなるが、大きく分けて①松前・蝦夷地における輸出海産物生産集荷のうち

俵物（煎海鼠・干鮑）を論じた第 1 章・第 2 章、②松前・蝦夷地における輸出海産物生産集荷のうち諸色昆布を論じた第 3 章・第 4 章、③松前・蝦夷地における輸出品集荷のうちラッコ皮の集荷を論じた第 5 章、④南部藩領における昆布の集荷を論じた第 6 章、⑤松前・蝦夷地と南部藩領における俵物・昆布の集荷システムと商品価値の異同を論じた第 7 章で構成されている。これらは概ね、長崎における集荷主体の史料に立脚した集荷システムの解明と、その史的評価をテーマとしているが（第 1 章・第 3 章・第 5 章・第 6 章・第 7 章）、加えて第 2 章・第 4 章では、蝦夷地における生産主体の史料を用い、アイヌ集団を含む在地社会（「場所」）にあつて輸出海産物生産が有した意義の解明が意識されている。

第 1 章では、松前領における俵物集荷システムが具体的に解明されており、従来の研究史の欠を埋める実証研究として評価できる。とりわけ、天明 5 年（1785）の長崎会所直仕入制導入（＝箱館俵物会所を介した集荷）以前における、長崎一手請方問屋による松前藩領の間屋を介した集荷システムを「松前三湊」惣問屋制」と捉え、そのなかに「下請三湊」による松前地百姓（漁民）からの俵物集荷システムが組み入れられていたことを実証的かつ明瞭に描いた点は、重要な指摘であった。第 2 章は、西蝦夷地における俵物（煎海鼠・干鮑）生産の実態を、場所請負人史料を用いて個別実証的にアプローチした点で、従来の研究史に具体的な知見を付加することに成功している。とりわけ、漁期スケジュールの中で、アイヌ漁業者の果たした役割につき、個別データを伴いながら描いた点は、時代と地域とが明確に示された貴重な叙述であり、アイヌ史的観点からも注目される成果である。

第 3 章は、輸出海産物のうち「諸色」に分類される昆布の最大生産地である松前蝦夷地を事例に、長崎一手請方問屋の側の史料を用い、その集荷の構造を明らかにしようとした仕事である。集荷側の視点から描かれた当該分野の研究は少なく、実証的側面からも注目される成果となった。また、集荷対象が「中品」である点、また、利潤が大きいのみならず、松前蝦夷地産のみで 1 万石を超える輸出量とそれを凌駕する生産の余剰分が市場に流通する点に着目し、「量的な存在感」というキーワードで昆布の輸出商品としての存在感を強調する文脈は、今後の研究動向にもよいインパクトを与えうる成果であるとの印象が残る。第 4 章では、昆布の最大生産地である蝦夷地

のうち、トカチ場所を事例として生産のありかたが個別に論じられた。昆布がトカチ場所の出産物のうち大きな比重を占めているとともに、産出昆布全体のなかに占めるトカチ産の割合が少ないことが、当該地域を事例とした理由であり、前章で評価した昆布の「量的な存在感」が地域社会のなかに及ぼした影響を指摘した点は説得的である。また、それを評価するための数値的整理は注目される。更に、隣接場所（ホロイズミ場所ショヤ）への昆布出稼ぎの実態と、それへ参入するアイヌ社会の姿を具体的に描いた点は、アイヌ史的観点からも興味深い叙述となった。

第5章では、松前藩主が集荷を独占する高価な「軽物」のひとつとして17世紀より知られたラッコ皮の、輸出諸色としての側面が論じられた。従来、ラッコ皮が長崎経由で中国へ輸出されたことについては、その実否を含め議論が交わされてきたが、本章において長崎一手請方問屋側の史料により、「獵虎皮」の調達を前提とした集荷システムが存在したことが明らかにされた点は、貴重な収穫であった。ただし、口頭試問の際に議論となったように、オランダ側史料に記される「otter vellen」が^{かわうそ}獺皮であった可能性は高く、そうであるとするならば、これまで着目されてこなかった獺皮の、輸出商品としての意義や価値、ならびに狩猟圧の影響を検討するという、重要な研究課題を見出すことができた。

第6章では、天明～寛政期（一手請方問屋集荷末期～会所直仕入前期）を中心に、これまで積極的に利用されてこなかった長崎の会所関係史料を素材に、輸出昆布に占める「南部昆布」のシェアと、集荷のシステムとを明らかにし、その歴史的意義が論じられた。当該期における産出昆布全体の約15パーセントを占める南部昆布が、輸出昆布全体の半数以上を占め、その大半を下北産昆布が占めていたことを初めて明らかにしたことは重要であった。またその理由につき、仕入価格の低廉さがあったという、請方問屋あるいは長崎会所側の事情があったことを指摘した点も、説得的である。総じて本章では、当該期の輸出海産物、ひいては輸出品のなかに南部昆布が占める存在感の大きさが強調されており、当該研究史における今後の検討課題を喚起した価値は大きいとの印象を得た。

第7章では、第1章・第3章で論じた天明～寛政期の松前・蝦夷地における俵物・昆布の集荷・長崎回漕のシステムと、第6章で論じた同時期の南部藩におけるそれとを比較し、両者間に温度

差が存在することが論じられた。また、蝦夷地東部（日高地方以東）で産出される「ミツイシ昆布」の、国内市場における価格と、唐船による買入価格との間に格差があることが指摘され、後者が優位であったため「南部昆布」とともに、積極的に輸出品として長崎へ回漕された点も総合的に論じられた。口頭試問の際に示された昆布の生物学的な品種と近世における銘柄との関連を含め、今後さらに検討していくべき論点も明確にすることができた。